HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	富松保文 『アウグスティヌス―〈私〉のはじまり』（NHK出版）
Author(s)	小沢, 明也
Description	書評
Citation	哲学, 41, 121-125
Issue Date	2005-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35035
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_RP121-125.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《書評》

富松 保文
『アウグスティヌス―〈私〉のはじまり』（NHK出版）

小沢 明也

この著作の書評を書くにあたって、私は俯き地を見つめ、それから顔を上げて鏡を見た。そこには、著者にお会いしてから二十年、著者からは様々な恩を受けてきたが、その書評を失礼ながら書こうとしている〈私〉が無気味に受容しがたく映っていたが、神や使徒の顔は見えなかった。著者は現代フランス哲学の気鋭の研究者であるとともに、古くから「内なる人」を探求し続けている中世哲学研究者でもある。読者はこの両輪によって鏡に映るものの謎という起点から〈私〉という謎という哲学の始原へと回帰させられるだろう。

この著作は哲学者・アウグスティヌスについての入門書であると同時に、生きた哲学の入門書でもある。これは『シリーズ・哲学のエッセンス』の趣旨であるが、この著作ほどこの趣旨をうまく体現しているものは多くはないだろう。アウグスティヌスは周知のごとくローマ帝国が滅亡しようとする時代における最大の教父であるとともに、〈私〉とは何かを問うた哲学者でもある。今日、情報がグローバル化して匿名性が増し、それを第一に具現化したアメリカが一強の時代となっており、現代とローマ帝国時代との類似性が主張される時代ともなっている。このような現代において、

ローマ帝国が滅亡の危機に瀕している時代に内なる自己とその起源を探求したアウグスティヌスへと誘うことは興味深いことである。さらに、他者認識が自己認識に先立つことが各学問領域で主張され、思惟による自己認識を哲学の原理とする近代的自我は時代遅れのものとなってしまった。このような社会と哲学の現在において、アウグスティヌスが近代を超克したかのような〈私〉を問うた意味について考えることは重要なことであろう。

この本のシリーズは百頁程に制約されているので、著者にとっての哲学者の見方と著者自身の哲学自体がどこにあるのかが明確になる。この本の場合、その中心は副題の「〈私〉のはじまり」としてアウグスティヌスの『告白』の核心を読み解くことである。この「謎」（問題）はシリーズの趣旨にうまく応えて、それら二つの観点から考察される。第一はアウグスティヌスを巡る思想史と研究の観点、第二はいま哲学するという観点である。第一章は主に第一の観点から書かれており、全体の問題提示に始まる。著者は聖書の「愛の賛歌」の文章を引き合いに出し、「鏡におぼろ」（謎）に「映ったもの」が普通は私なのに、なぜ神となり、その像を「顔と顔を合わせてみることになる」のはなぜかを謎として提示する。この謎は「私が私であるということが」なぜわかるのかという謎に還元される。この解明にまず必要とされるのが、アウグスティヌスが生きた時代背景と思想状況である。その時代はローマ帝国末期であり、帝国の過度の膨張が外敵との戦いを絶えず強いられる状況であった。そのような世界にあって、人々は「帰属すべき故郷を失った」「世界市民」たる誰でもよい私であり、世界はインパーソナルな場所となり、アイデンティティーを失ってしまっていた。このような状況において、私が神の「似像」になることによってはじめて、私は他人に代替されない比類なきパーソナルなものとして現れる。著者はこの思想史による「個」の発見を著者自身の哲学とアウグスティヌス解釈によって裏付けることになる。第二章はいま哲学することを重視しており、フロイトからの心理学を援用することによって、人が鏡を見て映った像が見慣れたものであると同時に「無気味なもの」として現れる経験を取り上げる。鏡に映った像が自分の像であるとわかるためには、他者が自分を見る「眼差し」を学習し引き受けなくてはならない。経験に照らして

も、自分を自分として知らしめるもの、「独自の内面世界を独自なものとして意識させるのは、まさに他者」なのである。第三章は、以上の結果を踏まえて、『告白』を解説・解釈し、先の聖書（コリント書）の謎（鏡に映った顔が私であるはずなのになぜ神という他者なのか）に繋げる。アウグスティヌスは夥しい数の作品を書いたが、そのうちでも自分自身を語る『告白』が取り上げられる。というのも、この作品はこの本のテーマに相応しいとともに、著者自身の哲学と著者が捉えたアウグスティヌスという人そのものとその哲学の核心を表したものだからであろう。著者はアウグスティヌスにおける人生最大の出来事「ミラノの回心」をconversio という意味から「起源への回帰と新たに生まれ変わることという二重の意味」に捉え、それが『告白』全体のテーマ（「はじまりからはじまりへの回帰」）とみなす。実際、『告白』は自分の誕生がいかなるものであったかを記憶していないことから始まり、「自分がどこからこの世にやってきたのか」を問い求め出す。この世における誕生から回心までのこの世の流れ（一巻から九巻まで）という時間軸を水平軸、十巻における記憶、十一巻での時間そのものへの問いは、垂直的時間遡行と見なされる。時間は心の拡がり、すなわち私そのものであるので、私のはじまりへの問いは、時間のはじまりの問いとなる。したがって、十一巻から十三巻までは創世記冒頭の解釈、すなわち「天地創造という「はじまり」そのものの探求」の解釈となる。時間がないところから時間が始まるその瞬間を「いつ」と問えないように、全宇宙が生まれる以前には時間も空間もない。そのように、私のはじまりは私をこえてあなた（神）に見いだされ、真のはじまりへと回帰する。はじまりへの回帰を告白する個人とは、英雄伝としての「狭い意味での個人」でも、自分の生涯を端的に語る「主体」でもなく、内へと向かう「自己吟味」「自己探求」を貫き通す「自我あるいは人格」でなくてはならなかった。この外から内への回帰は新プラトン主義の影響によるが、著者はベルクソンを援用しつつ内と外とを分かつ身体でさえ「私」なしに内も外もないことを確認し、「内への回帰」を「自分が自分であるということに目を向け変えること」とみなし、「内」に「私」のはじまりを見いだす。その「内」のはじまりは時間のはじまりが時間を超越しているのと同じに、私という内を超え、神に見いだされる。

「内なる私への回帰とは」、他者とともに「他者を目指」すものだったのである。この過程は第四章において鏡に映るものの謎に繋げられる。著者は、神は自らに似せて人間を造ったという『創世記』の一節とその解釈からその謎を謎として理解する。すなわち、著者は、人間が神の似像であるとともに、「人間は自らの姿に似せて神を創った」（フォイエルバッハ）という相互の類似から謎のはじまりを主張するのである。類似を〈馴染み―新奇〉の関係から考察しても、〈私〉は私に馴染み深く、神の方が新奇であるというのが普通に思い浮かべられることであるが、すでに〈私〉は私にとって「無気味」でよそよそしいものであり、〈私〉も未知なるものである。「私とは何者なのか」が自分ではわからない状況において、人はその答えを他者に問わざるを得ない。鏡に映る像が自分そのものではないのにその像を自分として引き受けざるを得ないように、「他者の言葉を鏡として、その鏡のなかに自分」を探求せざるを得ない。すなわち、「神は御自分にかたどって人を創造された」という言葉を引き受けざるを得ない。他者に告白し、他者の言葉を信じるというのは、他者を愛していなくては不可能である。その真に愛する相手とは、〈神〉以外にない。現に、アウグスティヌスは『告白』において神を「あなた」と呼び、「あなたは私にとって、何者にましますか」と問うているのである。私はあなたという神と「合わせ鏡のように互いに互いを映しあ」う。かくして、「愛」において私は神と向かい合うことになったが、「私とは何か」が答えられたわけではなく、この謎に対する新なる探求が始まったのであり、はじめの問いそのもの、哲学探究それ自体が新たに始まるというわけである。

以上は本の概略を示したが、最後に問題点と別の筋立てを考えてみたい。まず、「個」の誕生に関しては、この本の特性からして、思想史による詳細な論証は鏡の枠外であるが、厳密には次の考察が必要であろう。まず、ストア派においても、厳しい自己探求の末に、他者と自己と神との共同による自然に即した生き方を主張するわけであり、そもそもアウグスティヌス自身がキケロの書物から得た哲学経験を無視してはアウグスティヌスの回心も〈私〉も語ることはできない以上、アウグスティヌスの創造論と「愛」という観点は打ち出されているものの、アウグスティヌスとストア派

との関係を問い直す必要があるように思える。次に、近代的自我との関係に関して言えば、パスカルやマシューズらが主張したようなデカルトのコギトとアウグスティヌスのそれとの差異について著者の鋭い調査と指摘が期待される。最後に、アウグスティヌス哲学・神学の核と言えば「照明説」。この説を「鏡」の比喩にそのまま当てはめるという手も平凡だがあったのではないかと思う。鏡に映った姿を見るためには光が必要なのであって、この光の考察は内なる闇と他者の考察につながり、身体感覚による自己認識・人格としての自己認識・神と向かい合う似姿としての自己認識の段階に自然光・自然の光・神の光が対応する。神の光は前二者を創造するとともに、〈私〉を照らす光である。この光が微かに見えることによって、鏡と向かい合い、〈私〉を新たに問い直す哲学空間が見いだされる。このような野暮な筋立ても可能かもしれないが、このように読者に考えさせて〈私〉という哲学的問いへと誘ってしまうことが、この本の最大の凄味なのではないかと思う。私は鏡に映る自分を見ると、著者に対して地にひれ伏さなければならないことを最後の一文を書いているいま実感している次第である。